



# 目次

プロローグ	1
1：少女は連れられる	4
2：少女は連れられる	8
3：少女は連れられる	13
1：ベルフェゴール	16
2：ベルフェゴール	20
3：ベルフェゴール	23
4：ベルフェゴール	26

## プロローグ

私の両親は、焼き殺されました。

私はルーアンに生まれ、少し前に見た魔女<sup>ミ</sup>ジャンヌ・ダルク<sup>ク</sup>のように、本来火刑に処されるべきなのは私だったのです。

両親が言うには、生まれた時からそうだったと言っていますが、私はそれが異端だと知ったのは十歳を過ぎた辺りでした。

気づいた時には遅く、魔女として連れられそうになる私を逃がした両親は、代わりに魔女を産み、育て、逃がした魔女として処されたのです。

行く宛でもない私は、暫くの間、時に物乞いをしながらフランスの村から村へとさまざまい歩いていました。村人達が、魔女として忌み嫌った私の行動は、普通の人には見えないものが視えること。そして、姿なき者と話をすることです。

けれど、そういった者達は私には物心付く前から視え、話す事が出来たので、それらが本来見えないものであるかどうかすらわからなかったのです。

物乞いをしていた十歳の頃に、とある青年に出逢いました。

青年と共に旅をした事で、本来人間には見えない物の意味や私の力の理由を知る事が出来たのです。

一四七〇年。私は現在、モン・サン・ミッシェルの修道女として生きています。

物語と称すべき私の記憶は、一四三五年のことです。

この二年前に私は両親と死に別れ、一年程物乞いをしながら、フランスの村をさ迷っていました。

そして、何処か分からない村で、巡礼者の女性に拾われました。

彼女は私と同じくらいの娘をペストで亡くし、その魂の弔いと忌まわしき流行病の終息を祈る為の巡礼の旅の最中でした。

私は彼女に、母親を見ていました。そして、まだ甘えたい年頃であった私と、彼女の甘えて欲しい母性本能とが噛み合い、約半年程、彼女と二人でモン・サン・ミッシェルに向けて旅をしていました。

今思えば、モン・サン・ミッシェルにはとっくに辿り着いてもよかったのですが、悪魔の噂や流行病の噂、危険な場所を避けるなどしていると、どうやら随分迂回してしまっていたようです。

そのうち、運の悪い事に彼女は旅先で病に侵されてしまい、私を残して帰らぬ人となりました。

そこは海が近く、彼女がモン・サン・ミッシェルを目指した理由も海が好きだからと語っていたのもあり、海が見える場所に彼女を埋葬しました。

私は十歳にして、僅か半年程で再び物乞いへと戻ったのです。

ですが、その時は以前の行く宛ての無い私では無くなっていました。

彼女との旅で、彼女の意志を受け継ごうと決め、同時に私も彼女のように両親の魂を弔いたいと思っていたのもあり、場所はよく分かっていますでしたが、独りでモン・サン・ミッシェルへと向うことにしたのです。

お腹が空いたら、物乞いをしました。慣れているので、苦にはならなかったです。

眠くなったら、流行病で人の居なくなった家を探し、死体と共に眠りました。時々、親切な人に納屋で寝かせて貰ったりもしました。

そして、何日か過ぎた頃、また海が見えました。

そこは小さな村のようでしたが、人は居ませんでした。

今日はそこに泊めて貰おうと思いい、適当な家に入らせて貰ったのですが、黴の生えた食べかけのパンと飲みかけのワインが、食卓にそのまま捨て置かれていました。

他の家も見回りましたが、全てが同じ様な状態で、まるで食事の時間に村人が一斉に神隠しにでもあったかのような印象を受け、私は怖くなって外へと飛び出したのです。

もう陽も落ち掛けていましたから、諦めてこの日は適当な家で眠らせて貰う事にしたのです。

空腹でもあったので、捨て置かれたパンをいただきました。

死体の無いベッドは、いつぶりでしょうか。

パンを食べると、私は恐怖を忘れたかのように、すっかり眠っていました。

深夜、私は唸り声で目を覚ましました。

その唸り声は地獄で苦しむ魂の様に恐ろしく聴こえ、私はそれから眠れなくなっていました。

布団に潜って震えていたのですが、タイミングの悪い事に催してしまい、どうしても我慢が出来なく

なったので、泣きながらベッドを出ました。

外に出ると唸り声が村全体を覆っている事に気付き、私の足は恐怖でそれ以上進まなくなってしまったので、泊めてもらっていた家の影で小用を済ませました。今思えば、失禁に近かったかも知れませんが、家の中に飛び込むと、再びベッドに潜り込み、ガタガタと震えていました。

どのくらいそうしていたかは分かりませんが、ピタリと唸り声が止んだのです。

私は安堵し、ベッドから顔を出したのですが、目の前に赤い目の悪魔が私をじっと見つめている事にようやく気付きました。

唸り声の停止は、私を見つけた合図だったのです。

私があの時、例え失禁してでも家から出さえしなければ、悪魔は私を見つける事は無かったかもしれません。

私は、驚きと恐怖で自分を止められず、自分でも信じられないような悲鳴を悪魔に浴びせていました。

悪魔は私を抱え込むと、ずるずると海の方へ引き摺りました。

外に出た時、月の光に照らされて、悪魔の姿を見る事が出来ました。

海藻のような髪の毛の隙間から赤い目が覗き、鰐のような歯をした顔でした。鯨の様な滑らかな肌でありながら上半身は人の形をしていましたが、下半身は魚のようで足はありません。そして、鋭い鱗が生えていて、私の服や身体が当たると剃刀の様に切り裂かれてしまうのです。

私は死を覚悟して嗚咽するしかありませんでした。ですが、この時に奇跡が舞い降りたのです。

悪魔の前に、一人の青年が歩み寄り、足を止めました。

すると、地面から突如無数の鎖が飛び出し、悪魔を雁字搦めに縛り上げました。

そうして、私は悪魔の手から逃れる事が出来たのです。

けれど、私の腰はすっかり力を失ってしまい、立ち上がることが出来なかったのです。這うようにして悪魔から距離を取りました。

涙でぼやける視界の向こうに、月光と違う光に照らされた青年の顔が見えました。

その顔は人形のように表情を持っていませんでしたが、その隣に光の正体である大きな光の翼を持った女性が、彼の片目を開かせながら悪魔を見据えていたのです。

私は幼い頃からの慣れた感覚、両親を代わりに火刑にしてみましたあの感覚を思い出し、感じたのです。

光の女性は言いました。

『嫉妬の悪魔レヴィアタン。煉獄にお入りなさい』

レヴィアタンと呼ばれた悪魔は、青年の見開かれた目に吸い込まれて消えました。

その際の断末魔の悲鳴に、私は思わず耳を塞いだくらいです。

悪魔が消えると、光の女性は彼の身体の中に自ら帰るようにして消えてしまいました。

私は怖くて怖くて、一晩だけでいいから一緒に居て欲しいと思い、青年に声を上げました。

「ありがとうございます！」

彼は、私に目を向けてくれました。そして、首を傾げながら、不思議な事を言うのです。

「なんだ？」

「ありがとうございます！」

手を伸ばせば届くところまで彼が近寄ってくれたので、私は彼のズボンの裾を握りました。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます、というのが知りたい」

と言いながら、青年は私の顔を覗き込みました。

私は独りになりたくなくて、首を縦に振りました。

すると彼は

「では、来い」

と言いましたが、私が動けないのが分かると、彼は私を赤子のように抱き上げ、適当な家へと入りま  
した。

「ありがとうございます」

私はお礼を言いながら、彼に抱き付いて泣きじゃくりました。

彼は困った素振りも見せず、ベッドの上に腰掛けると、私を朝まで抱いていてくれました。

翌朝、私は青年に抱かれたまま、目を覚ましました。

昨晚、よく見えなかった金色の髪が私の視界に映り、青年の灰色の眼が私をじっと見つめていました。

私は恥ずかしくなって青年から離れようとしたのですが、彼は私を抱いたまま言うのです。

「ありがとうございます、とはなんだ？」

私は、昨晚の事を思い出しました。

「お礼の、感謝の言葉です。夜は助けて貰いました。そして、朝まで一緒に居てくれました」

「よくわからないから、一緒に来て教えてくれ」

「私は、モン・サン・ミッシェルに行きたいのです。貴方は？」

「ならば、モン・サン・ミッシェルに行こう」

まるで、彼には意思が無いように感じられました。

巡礼の旅は子供一人では不便ですし、無理もあります。ですから、私は彼に甘んじる事にしました。

それが青年、私がミッシェルと名付けた彼との出逢いであり、私達の旅の始まりです。

## 1：少女は連れられる

この日は、巡礼者の彼女を失ってから、久しぶりによく眠った。

ずっと独りで旅をしていたので、考え無いようにしていたけれど、夜は特に寂しくて寂しくて死んで  
しまいそうだったから。

私は悪魔から助けてくれた青年にしがみついて眠り、目を覚ました時、彼の手が私の背中を子供のよ  
うにトントンと叩いていることに気が付いた。

多分、夜通しずっとこうしていてくれたに違いない。

私が驚いて顔を上げると、彼は昨晚とは違う、もう少し人間らしい顔付きで、私の顔をきよんと見下ろした。

私は、自分の顔が真っ赤になるのがわかった。思わず両手で顔を隠してしまった。

「ご、ごめんなさい」

青年は、昨晚と同じように私に言った。

「ごめんなさい、とは？」

大人のくせに感謝も謝罪も知らないようだ。その間も、ずっと私の背中だけは優しくトントンと叩いてくれていた。

「あの、これは？」

「こうされると、気分がいい」

青年は、自分がされて良かったことをしてくれていただけのようだ。

私は照れながら、青年から離れた。

「私の名前は、レヴィ。貴方は？」

彼は、頭を傾げた。

「名前？」

不思議な人だ。まるで、言葉を覚えただけの子供のようで、常識的な事を何も知り得ないように感じた。

「私の名前。私の事を呼ぶ時、私の事はレヴィと呼んで」

「レヴィ」

青年は私の名前を、口の中で唱えた。

「貴方は、なんと呼べばいい？」

私が青年を指差すと、彼は自分を指して言った。

「呼ばれたことがない」

「お母さんやお父さんは、貴方をなんと呼んでいた？」

「お母さん？ お父さん？」

「家族よ。一緒にいた人」

やはり、青年には感情がないのだろうか。顔色ひとつ変えずに、私の質問に答えた。

「そんなものはない。誰もいなかった」

「なら、貴方はどうやって大人になったの？」

彼は気付いたのか、なるほど、という顔をした。

「メタトロン。天使メタトロンだ」

私は、この話をやめた。

この青年は、おかしい。

けれど、昨晩確かに私は彼の言う天使を見たし、彼が私と同じ独りなのはわかった。

青年は人形なのかもしれない。だから、ありがともごめんなさいも知らなくて、人間の言うそれが何か知りたいのだろう。私はまた、異端を行っているのだ。

「人を学べとメタトロンが言うので、それをレヴィが教えておくれ」

「メタトロンは、何処居るの？」

青年は私に、昨日悪魔を吸い込んだ目ではなく、心臓を指差してみせた。

「ここに居る」

私は、少しだけ怖くなった。色々聞きたかったけど、それ以上は聞けなかった。

「モン・サン・ミッシェルと言ったな。そこに行こう」

青年が歩き始めたので、私もその後を急いで追った。

それから、昼過ぎまで歩き続けた。

青年が歩く先に、モン・サン・ミッシェルがあるのかはわからない。青年は気にせずにスタスタと歩き続けるし、私も方向すら分からずに、彼の後を追うだけだった。

昨晚、勝手に泊まった家の黴パンを食べたきりだったので、私は空腹に襲われていた。同時に喉の乾きも感じていた。

空腹は慣れているから後二日くらいは我慢出来るが、乾きはそうはいかない。もう少ししたら、気力を持っていても頭がクラクラしてくるのを知っている。

だから、私は青年に声を上げた。

「水が欲しいのです。少し休みませんか。出来るなら、一欠片のパンでいいので、何か食べたいのです」

青年は、急にピタリと足を止めた。そして、斜め右に向かって腕を伸ばして指差した。

「あの村で、今日は休もう」

私は少し安堵して、彼の袖を掴んだ。

「ありがとうございます」

「それだ。それを言う時の心理が知りたい」

「そうですね。自分がして貰って嬉しかった時、その気持ちを伝えたい時にありがとうと言うのです」

青年は、わかったような分からないような、複雑な顔をした。

実際、この青年は人形よろしく表情を変えることはなかった。

けれど私には確かに、彼の感情が表情に、何故か色として見えていたのです。

私が安堵しながら再び重たい身体を動かし村へ歩こうとすると、そんな私を察したのか、青年は再び私を赤子のように抱き上げて歩き始めた。

「まだ、自分で歩けます！」

私の中で、嬉しいやら恥ずかしいやらの感情が溢れ出した。

「レヴィは変だな。色が沢山変わる。今は、ブルー、オレンジ、パープル」

私は彼に抱かれたまま、しがみつくようにして彼の胸に顔を埋めた。

これまで、私に合わせてくれていたのだろう。村へは、予想以上に早く着いた。

青年と出逢った村とは大違いで、小さいながらも賑やかな村だった。人の声が行き交い、パンの香りがしていた。

私のお腹が鳴った。

私がお金が無かったので、自分から店に入ろうとは言えなかった。これまでも、物乞いをして喰い繋

いでいたのだ。

青年は、どうやって生きてきたのだろうか。

青年にチラリと目配せすると、彼はそんな私に気付いたようだった。

「店に入って、何か食べよう」

「私は、お金がありません」

「お金とは？」

「物を手に入れるために必要な物です」

それすらも分かっているようだったが、青年は自分の服に手を入れ、無造作に何かを握り出すと、私に手を出すよう指示した。言われた通りに私が手を出すと、私の両掌に溢れんばかりの金貨を乗せた。

「レヴィの言うお金というのはこれのことだろうか。これを渡せば、なんでもくれる。寝る場所も貸してくれる」

私は震える手で、落とさないように金貨を握った。

「どうして、こんなに沢山」

「そんなものが欲しいなら、幾らでもやる」

「い、いけません！」

「何故？ 何がいけない？」

「これは、大事にしないといけないものです」

これさえあれば、これだけの金貨があれば、巡礼の彼女も救えたかもしれない。そう思うと、自然と涙が溢れてきた。

私が金貨を握り締めて泣いていると、道行く人がチラリチラリと様子を伺ってくる。

「レヴィ。わかった、金貨についても教えておくれ」

私は涙を拭いながら答えた。

「貴方についても、教えてください」

青年は、また私の背中をトントンと優しく叩いた。

「どうしたんだい？」

聞き慣れない女性の声でしたので、私は思わず振り返って見た。

巡礼の彼女と同じくらい、青年よりは少し年上だろうか。女性が心配しながら、私の顔を覗き込んでいた。

「こんなに汚れて、泣いているじゃないか。あんた、父親なんだろう。もっと、しっかりしないとけないよ。何があったんだい」

青年は少しムツとしたように、女性に話した。

「モン・サン・ミッシェルに行きたい。けれど、今日はここで休みたいのだ。レヴィが、パンと水が欲しいというから」

女性は安心したように笑った。

「レヴィちゃんっていうのかい。あたしは、その居酒屋で働いているんだ。うちで泊まっていきな。この村じゃ居酒屋はうちしかないからね。少ないけど、まだ部屋は空いているよ」

私が青年に目配せすると、彼は私を抱いたまま、この居酒屋の女性に着いて歩いた。

居酒屋に着くと、女性が言う通り一階が飲食場所となっていて、二階が宿泊所となっているようだった。そこまで大きくは無いが、立派な居酒屋だった。

従業員かと思ったが女性はこの居酒屋の女将で、そこそこ裕福な家のようなのだ。

昼間からビールを飲む大人達を他所に、私と青年は静かな端の席を用意してもらった。

こんな所で食事をするのはいつぶりだろう。私は少し落ち着かない気持ちでいた。

「今、料理を運ばせるからね。その間に、今日泊まる部屋の用意をしてくるよ」

すると、青年は何かを思い立ったように女将さんに告げた。

「何日か泊まれるかな？ 金ならある」

女将さんは不思議そうにしながらも、構わないと言い、青年と女将さんの間で話がまとまったようだった。

暫くすると、私達の前に食事が並べられた。豆と野菜のスープに肉料理まであり、勿論パンもあった。

私は感動して、震えてしまった。こんな料理の山、両親が居た時ですら一度に口にした事は無い。

青年は自分のパンを掴み、私の前に置いた。

「これも食べるという。スープも肉も、全部食べた方がいい」

「こんなに食べられないわ」

「なら、残せばいい」

「そんな勿体ないこと出来ないわ」

私は料理を食べ始めたけど、青年は何故か口を付けようとしなかった。

「貴方は食べないの？」

「レヴィが残したものを食べよう」

「料理が冷めてしまうわ」

「構わないよ」

「一緒に食べた方が美味しいわ」

「そうか」

青年は、やっと食事を始めてくれた。どこで教わったのか上品に食べるので、私は恥ずかしくなって、彼の食べ方を見習う事にした。

料理がすっかり無くなると、見計らったように女将さんが部屋を案内してくれた。綺麗で広くてベッドも二つ、とても上等な部屋だった。

## 2：少女は連れられる

「こんな立派な部屋、初めて泊まるわ」

私がふかふかしたベッドの感触を楽しんでいると、青年が一瞬笑ったように見えた。そして、彼は暫くぼんやりと窓の外を眺めていた。

「何があるの？」

不思議に思い私が窓の傍に近寄ろうとすると、それを阻止するかのように青年は私の近くまで歩き、窓から離れたベッドに私を座らせた。

「何も無い。さあ、レヴィには、色々教えて貰わないと」

私は窓の外が少し気になったのだけれど、この時は大した事が無いのだろうと思っていたから、気にせず青年に私が知っていることを話し始めた。

「金貨というのは、時には争いの種になるし、人を悪にも変えてしまう物なの。それに、これを手に入れるために、人は沢山働いて辛い思いもいっぱいしなきゃいけない。けど、この金貨があれば人を助ける事も出来るし、飢えることも無いわ」

これらは全て、かつて母が私に教えてくれた事だ。母は生涯金貨を見る事は無かったかもしれないけれど、だからこそその価値をよく知っていた。

「人は、こんな物が欲しいのか。だから、これを渡せばなんでもくれる」

「そうよ！それが欲しいの。沢山欲しいのよ。貴方はどうして持っているの？」

私が言うと、青年は掌を下にしてベッドに手を翳した。彼の眼が一瞬チカリと金色に光ったように見えた。同時に、彼の手から金貨が生まれた。

「最初は必要な時、メタトロンが運んできた。けど、マモンを取り込んだら好きに出せるようになった」

「マモンって？」

「悪魔だ」

私は青年に聞いてみた。少し怖かったけど、このまま旅を続けるには必要だと思ったからだ。

「貴方にとっての悪魔や旅は一体なんなの？」

青年は首を傾げた。

「レヴィが言うことは、ずっと不思議だ。メタトロンは何も言わないし、聞かない。時々、一方的に俺に告げるだけだ。目的の様なものを？」

「よく分かっていないのね。メタトロンは、貴方になんて言ったの？」

「悪魔を取り込んで、人間を学びなさい。正しい人間を教えてください人間を探して、共に旅をしなさい。そう言ったから、レヴィに決めた」

「私が正しい人間とでも!？」

「違うのか？」

肯定も否定も出来なかった。

何故なら、私は私自身が子供である事を十分理解していたし、それ故に必ずしも正しく生きているかどうかの自信が無かった。

亡き母や巡礼の彼女の様に、今は導き、叱ってくれる者がいないのだから。

正しく生きなさい。亡き二人の母のその言葉は、私を酷く縛り付け苦しめていた。

私は俯き、泣くのを堪えた。

青年の手が、私の頭部を優しく撫でるのがわかった。

「レヴィが正しいと思うなら正しくあるのだろう。もし、それが間違っていたのなら、きっとメタトロクが教えてくれる」

「貴方は、メタトロクに叱られた事があるの？」

私は少し怒っていたのだと思う。私が見た事のある天使は、決して怒り等を顕にしたことは無かったけれど

「ある」

と、青年の意外な返答に、私は彼へと顔を上げた。その顔が苦笑いをしているように見えた。

「俺がレヴィくらいの時だ。メタトロクが最初に悪魔を探せと言った。けど、俺は何もしなかった。それまで何もしていなかったし、考えた事もなかった。だから、何も出来なかった。メタトロクは怒ったんだと思う。その日、俺の手首に杭の痕が浮き出し、血が滴った」

聖痕と呼ばれるものだと思う。私はそう確信した。

「そんなの、怖い」

青年は、再び私の頭を撫でた。

「レヴィなら大丈夫」

何故、そんな無責任な事を言うのだろう。

私は、嫌気を覚えた。

天は勝手だ。

私に妙な力を与え、両親をそれによって失い、今度は妙な責務まで背負わすのだから。

窓の外が少し明るく見えていたので、いつしか夜になっていた事に気が付かなかった。焚き火でもしているのだろうか、この時は思った。

青年は私に窓の外を見せないようにしながら、寝る様に進めた。

私も疲れていたから、その日は直ぐに眠ってしまった。

「おやすみなさい」

なんだと言いたげな青年の顔が見えたので、私は一言だけ告げた。

「寝る前の挨拶」

「おやすみなさい」

明け方だと思う。夢なのか、夢じゃないのか。うつらうつらとした意識の中で、私は助けられた時に

青年と共に見た、天使メタトロンと出逢った。

『レヴィ……レヴィ……』

メタトロンは私の名を何度も呼び、私の額に口付けをして告げた。

『聖なる力を持つレヴィ。主に愛されたレヴィ。彼に人の名を与えて』

私はメタトロンに色々聞きたかったのだけれど、その時は声が出なかった。

けれど、また直ぐに出逢える気がしたから、私はメタトロンの言葉だけを聞いて目覚めた。

コン、コン、コン、コン

扉をノックする音だった。ふと隣を見ると、青年はシートに包まって眠っていた。余程、疲れているのだろうか。

「はい」

代わりに私が、返事をして扉を開けた。

「食事の用意があるからね。必要なら食堂に食べにおいで」

女将さんはそれだけ伝えると、忙しそうに食堂へ戻っていった。

「おはよう」

私は青年の身体を揺らした。

「食事が、あるみたいだよ」

青年は気だるそうに、返事をした。

「レヴィ、一人で行っておいで。全部食べていいから」

体調が悪いのだろうか。

私はシートの隙間から手を伸ばして、青年の顔に触れた。熱を感じた。

「大変、熱がある」

青年は、苦しそうに答えた。

「大丈夫。悪魔を取り込んだ翌日はいつもこうだ。一日寝ていれば良くなる」

そう言われても、心配である。

「スープを持ってくる。あと、お水も貰ってくる」

私は、食堂へと向かった。

食堂では女将さんが忙しく働いており、私を見つけて直ぐ声を掛けてくれた。

「レヴィちゃん、一人かい？ そのテーブルに用意してあるそれだよ」

私は青年の事を言い出せず、とりあえず食事を始めた。

食べ終わる頃、お店もようやく落ち着いたので、女将さんが話し掛けてくれた。

「父ちゃんは、寝てるのかい？ まったく、仕方のない親だねえ」

私と青年を親子だと思っているのか、女将さんは私に苦笑いを見せた。

「いえ、父では無いのです。身寄りの無い私を、助けてくれた人なのです」

「そうかい」

女将さんは意外そうな顔をした。

「あの、彼に熱があるのでお水をくださいませんか。それから、このスープを持っていてもいいですか」

女将さんは、私の頭を撫でた。

「いいよ。そういう事なら、私が全部運んであげるよ。そうかい。昨日から調子が悪かったのかもしれないねえ」

女将さんが青年に何を言われたのか知らないけれど、女将さんは納得したように話していた。

私は女将さんの言った通り、一旦一人で部屋へと戻った。

「ただいま。女将さんが、色々持ってきてくれるって」

私が青年に言うと、彼は苦しそうに「そうか」と言った。

シーツを少しだけ捲って、青年の顔を見た。

私を襲った悪魔を取り込んだ彼の片目が見えたのだけれど、その眼は真っ黒で赤い炎が燃えているように光っていた。そして、頭にあの悪魔の悲鳴だろうか。悲痛な金切り声が響いた。

私は驚きと恐怖で、床に倒れてしまった。

見てはいけないものを見てしまった気がした。

コン、コン、コン、コン

扉をノックする音がした。

私は扉を開けて、その向こうに立っていた女将さんに抱きついた。

「おっと！どうしたんだい？」

女将さんが、驚いたように声を上げた。

女将さんは私が見つくの振り払ったりはせず、運んできたワインとスプーンを小さな部屋のテーブルに置いてから、私を抱きしめてくれた。

水の入った洗面器とハンカチーフを持った女性が後から部屋に入り、それらを置くに出ていった。

「レヴィちゃん、どうしたんだい。何か、怖いものでも見たのかい？」

チラリと、女将さんの視線が窓の外を映した。

私になって振り返ろうとすると、青年と同じように女将さんもそれを止めた。

「こんなに怯えて。でも、大丈夫。大丈夫だよ。あんたはまだ小さいからねえ」

どういう意味なのだろうか、と私は思った。

女将さんにしがみついているうちに、不思議と気持ちが落ち着いていた。

「ごめんなさい」

「いいんだよ。そうだ、今から出掛けなくちゃいけないからね。帰ったら、洗ってあげよう」

私は、無理に笑って頷いた。無理に笑うのは苦手だけど、慣れている。

女将さんは私の頭を撫でると、青年に目をやった。

「お医者を呼ぼうか？」

私は戸惑った。

「いらぬ。寝ていれば直ぐに良くなる」

彼の苦しそうな声がした。

「そ、そうかい」

私は、青年を庇うように女将さんに言った。

「大丈夫！私が診てる」

「そうかい。じゃあ、早めに戻るよ」

「気にするな」

と、彼。

女将さんは部屋を出ていった。

私が女将さんを少し見送ろうと追いかけると、青年が声を上げた。

「レヴィ、行くな！外に出るな、外も見るな」

その声が怖くて、私は足を止めた。

女将さんが用意してくれた洗面器にハンカチーフを浸すと、それを固く搾って青年の顔に乗せた。ハ

ンカチーフを乗せる私の手を、彼が握った。

「レヴィ、震えてる。怖がらなくていい」

「私は貴方が怖いの」

私は、青年から少し離れた。

### 3：少女は連れられる

私には、青年が何者なのか分からない。

何度も述べるように、まるで命だけを貰った人形のようにだし、何より私自身が忌み嫌われ気味悪がられた力をすんなり受け入れられるこの状況が、自他共に考えても気持ち悪かった。

私はポケットから、青年のくれた金貨を出して見つめた。

（金貨は綺麗だなあ）

ぼんやりしていたら、またあの声が聴こえた。

『レヴィ、彼に早く名前を与えて』

私は驚き、思わず金貨を投げ出してしまった。床にバラバラと散らばる金貨の音が、部屋中に響いた。

『彼とレヴィは、よく似ているはず』

私は金貨を拾えず、耳を強く塞いだ。

（メタトロン！メタトロンが私に話しかけてる。夢じゃなかった）

メタトロンの声は直ぐに止んだ。

耳から手を離すと、今度は青年の苦しそうな呻き声が聞こえてきた。

私は彼の額から濡れたハンカチーフを取り、再び水に潜らせてから、また彼の額へと戻した。

私は、青年に名前を付けることに抵抗があった。何故なら、彼に名前を与えてしまえば、私も妙な運命に縛られてしまう気がしたから。

いよいよ、逃げられなくなる気がして、その覚悟が出来なかったのだ。

「メタトロン、貴女は何故私にこのような使命を与えるのですか？」

私の単なる独り言だ。故に、誰も答えはしなかった。

こんな子供に、何を期待するのだろうか。

コン、コン……と、ドアを小さくノックする音が響いた。

私はドアを開けた。そこには、出掛けたはずの女将さんが立っていた。

「なんだい、レヴィちゃん。まだ昼のディナーを食べに来ていないんだってね」

「あー」

そうだ。普通に食べて生きるのであれば、昼のディナーを食べて、間食をしてディナーを食べる。けれど、そんな生活をずっと送っていなかったから、私はすっかり忘れていた。

「彼を看ていたんだろう。偉いねえ」

女将さんが、私の頭を撫でた。笑っていたけど、何故かその顔は無理をしているようにすごく悲しそうで、そしてさっきまでしなかったはずの独特の臭いがした。私は、この臭いを知っている。思い出せないだけで。

「後で、また食事を運ばせようね。まだお腹が空いていないなら、その前に洗ってあげようか」

私が寝込む青年をチラリと見ると、彼は気付いているのか

「レヴィが望むなら、行っておいで」

と声をかけてくれた。だから、私は女将さんに着いて部屋を出た。

汚れや垢を落とせば、少しは卑屈な感情も流せるかもしれないと思ったからである。

女将さんに着いて歩くと、すぐ近くの部屋にお湯を張った大きめの桶が置いてあった。

私は服を脱がされ、その中に入れられると、女将さんの手によって丁寧に洗われた。

こんなに、優しく丁寧に洗われたのは久しぶりだろう。

どんなに貧しくても、いくら迫害を受けても、私の両親は私を心から愛してくれていたのを思い出した。

『主に愛されたレヴィ』

メタトロンは、確かに私にそう告げた。

青年を主は愛しているのだろうか。天使は祝福をしているのだろうか。どちらも、彼に何らかの罰を与えているようにしか私には思えない。

青年が悪魔を取り込むことで何らかの対価を得られるのだろうか、それと同時に青年の身体が悲鳴を上げているのは何なのだろう。

私は、悪魔をよく知らない。けれど、もっと小さな頃に聞いたことがある。悪魔にも悪魔の役割があると。人の弱さや醜さの象徴であるのと同時に、それらは自由の象徴でもあると。

母は、私によく言い聞かせた言葉。

『レヴィの力は、きつと天の力だよ。だから、人はその力を恐れるのだろうか。決して墮天してはならないよ』

思い出した！ ずっと、忘れていたんだ。

『レヴィ、必ずその力の意味を知る日が来るから。きつと、辛いだろうね。でも、それが天に愛されてるということだろう。あのキリストだって、そうだったのだから』

私の頬に、涙が伝うのを感じた。それを女将さんに知られたくなくて、私は慌ててお湯で顔を洗った。

両親が焼き殺された時、あの時、これ以上辛い思いをしなくて、それで、全て忘れてしまう努力をしたんだ。

「どうしたんだい？」

女将さんは私に気付いて、洗う手を止めて私を氣遣ってくれた。

「うん。もう、大丈夫。こんなに丁寧に洗ってもらったの、久しぶりだったから」

「そうかい。よかった」

そうだ、思い出した。私は、全部思い出した。

女将さんのあの臭いは、人を焼いた時の臭いだ。

多分、青年はこれを隠したかったんだ。

昨日、窓の外で人を焼いていたんだ。

それから、さっきも。きっと人を焼いていたんだ。

この村は、人が焼かれる村なんだ。

「レヴィちゃんは、何処かに向かっているのかい？」

私は頷いた。

「彼とモン・サン・ミッシェルに行くの」

「巡礼の旅かい？」

「うん」

「大天使ミッシェルの像があるのだろう。見てみたいものだね」

「うん」

私は、桶から出た。女将さんは丁寧に洗ってくれて、更に可愛い服まで着せてくれた。

「よかった。ピッターだ。それに、良く似合うよ」

「この服は」

「レヴィちゃん、着てくれるかい？ 返さなくていいからね。この服は、亡くなった娘が着ていた物だよ」

「え？」

女将さんは、私を抱きしめた。私に見えないように、泣いていた。

「厳密に言えばまだ生きてるんだけどね。どの道、もう大きくなってしまっただけだからいいのさ」

私はそれから食堂へ移動し、女将さんに食事をさせて貰うと、青年の為の食事を持って部屋を出た。

部屋に戻ると、青年はベットから起き上がり、窓辺に項垂れながらぼんやりと外を見ていた。

「おかえり、レヴィ」

私は唾を飲み込んで、気持ちの緊張を解してから言った。

「ただいま、ミッシェル」

彼は、驚いたような顔を向けた。

「ミッシェル？」

「そう、貴方の名前」

「ミッシェル……ミッシェル、ミッシェル。そうか、俺はミッシェル。そうか、気に入った」

ミッシェルが、嬉しそうに言った。

「そういう心の時に言うのよ。ありがとう、って」

「なるほど、ありがとうはこういう時に言うのか」

それが合っているのか間違っているのか、本当の所は分からない。

けれど、私は自信を持っていこうと決めた。

きっと、ミッシェルは天使の代弁者に違いない。

私にかつての魔女よろしく、主の声など聞こえはしない。しかし、代弁者である天使の姿や天使の声は確かに聞こえるのだから。

ミッシェルの背後で、メタトロンが満足そうに笑っているように見えた。

「もう、身体は大丈夫なの？」

「ああ、平気だ」

「食事を食べて」

「レヴィが食べればいいよ」

「私は食べたわ。ちゃんと、食べなきゃ駄目よ」

「そうかい？」

「また貴方が倒れたら、悲しいもの」

「そうなのか」

ミッシェルは、食事を食べ始めた。言葉とは裏腹に、お腹が空いていたようで、あっという間に平らげてしまった。

「ミッシェル。私に悪魔の事を教えて。私も知りたいわ。きっと、私も貴方と同じように、天の運命を持つているはずだから」

## 1：ベルフェゴール

悪魔について、教えて欲しい。

そう願った私に、ミッシェルは知っている全てを話してくれました。

それはまるで他人事のように、それがメタトロンがミッシェルへ教えた事そのものなのだとわかったのは、彼と旅をしながら共に生活を続けていくうちにでした。

もし、あの時の私が子供ではなく、今のような大人であったのなら、もう少し早く察することが出来たのかもしれない。

だからここは、その時の子供レヴィの視点ではなく、今の私の視点から語ろうと思います。

ミッシェルは、ベストによって人の絶えた村の、死んで腐り果てた妊婦の腹から産まれたのだそうです。

それは、奇跡を超えた話なのです。

ミッシェルが独り旅立てるその日まで、天使メタトロンは彼にミルクを与え、歌を聴かせて育てたのです。

ですから、ミッシェルは人としての在り方を知りません。

更に、生まれつきミッシェルには、人として最も重要なものが欠けていたのです。

それは、心です。

人の心とは、善悪共に兼ね備えた感情なのです。欲であり理性でもあるのです。それらが全て、ミッシェルは欠けていたのです。

だから、ミッシェルは喋る事は愚か、考える事も感じる事も出来ませんでした。

メタトロンはミッシェルに、旅立ちへの祝福として、言葉を与えたのだそうです。

そして、告げました。

『貴方は罪を償わなければならないと』

私はそこまでミッシェルに聞いて、メタトロンの言うミッシェルの罪は何かと聞きました。ミッシェルは、わからないと答えました。

メタトロンが言うには、ミッシェルの元々持っていた善悪が、悪魔として具現化し、この世にさ迷っているそうです。それらをかき集め、本来の形を取り戻すことが、ミッシェルに与えられた罰だと言うのです。

メタトロンの言う、人を学べというのは、かき集めた善悪を判断するために必要なことだそうです。

言ってみれば、善悪を取り戻したミッシェルは、産まれたての赤子のようなもので、善悪の判断が付かないからという事なのでしょう。

子供のように、誰かがそれを教えてやらねばならないのです。

最初に出会ったのは、悪魔マモンだと言います。

マモンは金銀に魅入られたさもない存在であり、財宝をばら撒き、見せつけ、それを賛美に感じる強欲の心です。同時に持つのが、慈善と寛容です。(悪魔についての説明は、後に私が調べたものです。)

あの時、何も知らないミッシェルが私に優しさを与えようとしていた事、私を受け入れてくれた事は、きっとマモンから取り返した心であったのでしょう。

次に取り込んだ悪魔が、ルシファーでした。傲慢と謙虚の悪魔です。物乞いで命を繋ぐ汚い子供であり、普通なら見下し嫌悪感さえ持つであろう私に対して、ミッシェルが対等な気持ちで接してくれるのは、この悪魔から取り戻した心のお陰でしょう。

この時、私を襲った悪魔がレヴィアタンだと聞かされました。

レヴィアタンは嫉妬と感謝、人徳を持ちます。

ありがたい、の心を理解し始めた事、感謝が何か理解したいと人と関わりを持ち始めた事は、この悪魔が要因だろうと思います。

ミッシェルは一步步、人に近付いていました。そして、名前を与えられた事で、彼にその自覚が生まれました。

最後に、ミッシェルは告げました。

「この村にも、悪魔がいるよ」

さて、物語に戻すしましょう。

自分から言い出した癖に、私は怖くなった。

『勇気あるレヴィに、感謝と祝福を』

メタトロンの声が聴こえた。

あの、魔女もこんな気持ちだったのかな。

子供だった私は、単純にそう考えた。

「レヴィ、その服綺麗だね」

話を逸らすかのように、突然ミッシェルが言った。

「女将さんに貰ったの」

そういえば、彼の眼に炎の様に宿った悪魔はいつしか消えている。

「レヴィは、部屋から出ない方がいい。外も見ない方がいい」

ミッシェルは私にそう言うと、一人部屋を出た。

私はハッとして彼の後を追ったが、扉は何かで押さえつけられているかのように、ピクリとも動かない。

「ミッシェル！ ねえ、ミッシェル。開けてよ」

ミッシェルからの返事の代わりに、彼の靴が遠のく音が響いた。

私は窓に駆け寄り、窓を開けた。それまで入ることを拒んでいた、嫌な臭いが部屋中を満たした。

「人が焼かれてるの？」

私は思わず、そう呟いていた。

居酒屋の下から、声が聞こえる。

私は、窓の外を覗き込んだ。身体が落ちそうになるギリギリまで、身を乗り出し、確認した。

何故だか、そうしなければならぬ気がしたのだ。

「幸福な結婚生活など、存在するものか」

立ち上る煙の下から、そんな怒声が聴こえてきた。

煙で目が痛い。涙が溢れてくるが、目を逸らしてはいけない気がして、私は必死に目を凝らしながら

声の主を探した。

ぼんやりだけど、最初に見えたのは数人の若い女性が鎖に繋がれて、横並びに立っている姿。その向

かいに、炎の様なドレスを纏った、濃い栗色の髪の毛の女性の姿がある。

「どの様な女にも、性的で不道德な心があるのだ」

一方的に話をしているのは、炎のドレスの女性の様だ。

「それなのに何故女達は、幸福な結婚生活を夢見るのか。女が性的で不道德である以上、不可能な事で

あろう」

自分も女性だというのに、何を言っているんだらう。

私には、この女性の言う事がよく分からなかった。

「よって幸福な結婚生活など存在しない。結婚等、私には反吐が出る程、嫌悪感しか感じられないのだ。

それでも、幸せな結婚を信じると言うのなら、火刑に処されるといい」

そうして、繋がれた女性達は選別されていた。

先に燃え盛る炎の中で灰と化す女性達の姿を見届けながら、自分がどう在りたいか問いただされていくようなのだ。

鎖で繋がれた三人の女性達の二人は、結婚する事を諦めたようだった。そして、二度と恋人と愛を交わさない事を約束させられ、排泄のみ可能な貞操帯を装着させられていた。(この一連の流れは、私が当時の記憶を呼び起こしながら、再確認しているものである)

結婚を諦めず残った女性は、向かいの女性に向かって涙ながらに声を張った。

「私の中にも、性的で不道德な心はあるでしょう。人である以上、無いとは言えません。けれど、私はそれらを抑える理性を持っていると断言します。ですから、火刑を受け入れます。受け入れますから、先だった花嫁達と同様に、私にも愛する人と結婚するための時間をください」

炎の女性は、この勇気ある女性に告げた。

「では、お前の誠実な心を見せてみる。明朝、火刑に処す」

火刑を言い渡された女性は、その場で鎖を外された。そして、彼女は炎のドレスの女性に一礼した。

それを見計らったかのように、まさに火刑の最中であつた炎が静かになり、燃え残った骸骨が崩れ落ちた。

燃やされた新婦の夫であろうか。発狂しながら、まだ炎の残っているであろう瓦礫の山に駆け上り、崩れた骨を抱き締め、号泣していた。

私は、怖くて、腰が抜けたかのように部屋の床に崩れた。

母の顔が、父の顔が、頭いっぱい浮かんできた。二人を包む炎が、幻覚よろしく目の前に広がった。

私は、声を殺して大泣していた。

見るな、と言われたのに見てしまった後悔と罪悪感もあつた。だけど、嗚咽は止められず、止められない嗚咽を殺したくて、必死だつた。

ミッシェルの靴音が響いてきて、扉を開ける音がしたけれど、どうしていいか分からず、ただただ彼に謝っていた。

「ごめ……ごめんなさい……ごめ……なさい……」

ミッシェルが、私の身体に手を掛けた。

「見たのか」

ミッシェルは私を抱き上げると、胸の中に抱き寄せた。また、私の背中を優しく、トントンと叩くのだ。

「あれが、悪魔だ」

私は、ミッシェルにしがみついた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「ごめんなさい、とは？」

私は、彼の質問に答えられなかった。

「レヴィ、お菓子を食べよう」

ミッシェルなりに、私を慰めようとしてくれているのだろうか。突然、彼がそんな事を言い始めた。

「女将さんに、貰いに行こう」

今は何も食べたくない、とは言い出せず、私はミッシェルに抱かれるまま、食堂へと連れられた。

ところが、廊下を通り、階段を降り始めたところで「お菓子をください」等と言えない雰囲気の話が聴こえてきたのだ。

「二人で逃げちまいなよ」

女将さんの、嗚咽混じりの声だった。

「お母さん、私達が決めたのだから」

先程、火刑を宣言された女性と同じ声だった。

## 2：ベルフェゴール

「ミッシェル」

私はミッシェルに抱かれながら、彼の名を呼んだ。

ミッシェルは私に視線を落とし、その場で歩みを止めた。

「あの女の人、さっき明日火に焼かれるって」

ミッシェルは表情を変えず、さも当然のことのように「仕方ない」と続けた。

「悪魔に捕まったんだ」

「ミッシェルは、私を悪魔から助けてくれたよね」

ミッシェルは少し考えたようにしてから、首を傾げた。

「レヴィを助けたんじゃないなくて、悪魔の所にレヴィが居ただけ。レヴィの事は知らなかった」

私は思わず、ミッシェルの服を掴み、顔を近付けていた。

「私、怖かったの。でも、ミッシェルが助けてくれた。私はミッシェルが少し怖いけど、でも逃げたりしない。だって、助けてくれたんだもの。ミッシェルは、怖い存在ではないはずよ」

ミッシェルは、目を丸くした。

「俺が、怖い？」

「そうよ！だって、私も貴方も……」

私は、苦しい言葉を続けた。幼い頃から吐き続けられた、呪いの呪文だ。

「恐れられるべき異端であり、魔女ですもの」

私には、この時のミッシェルが悲しんでいるように見えた。

「レヴィも俺も同じ？」

私は頷いた。

「お願い、ミッシェル。あの女の人を、女将さんを、この村を救って。魔女ではなく、救世主（メシア）と呼ばれる存在になって」

ミッシェルがこの時どんな感情で、何を考え、何を思ったのかまでは分からない。

ただ、私はこの時。何故かミッシェルを信じて、最後まで旅を続けようと決心したのは確かだ。その理由は、わからないのだが。

「明日の朝、ベルフェゴールは集会の場に現れる。あの女を燃やしに。だからその時、俺はベルフェゴールを煉獄へと送ろう」

「ミッシェル、ありがとう」

メタトロンが教えたのであろう。ミッシェルはこの村の悪魔の事を、ベルフェゴールであると知っていた。

この時の私がまだ知り得なかった悪魔ベルフェゴールとは、人間の結婚生活を覗き見る悪魔であり、女性に性的で不道德な心を芽生えさせるのだという。

そのせいか、何故か女性に成りすましているくせに、酷く人間の女性を嫌い、幸せな結婚生活等は存在しないと強く主張する悪魔なのだそう。

そして、この悪魔は、ミッシェルの怠惰と勤勉の心であった。

今思えば、人形のようにただ言われたままに悪魔を取り込むミッシェルが、自分の感情に意志を持ち始めたのは、この悪魔の後からだだったと思う。同時に、そのせいか一気に人間らしく感じるようになったのだ。

めんどくさい、がんばろう、いやだ……そんな感情は誰しもが持ち合わせており、私にも少なからずあった。それでこそが、人間である。

私達の会話から存在に気付いた女将さんが、こちらに向かってきた。

私とミッシェルを見ながら涙を拭い、無理に笑って見せた。

「嫌だねえ、年を取ると涙脆くて。どうしたんだい？」

「あの女は？」

ミッシェルが聞いた。私は彼の服を引き、それは駄目だと首を左右に振った。しかし、私の思いはミッシェルに届かなかった。

「ベルフェゴールに死の宣告をされていた」

女将さんは顔を伏せた。

「ああ、あんたも見えたのね。そうさ、私の娘さ。腹に子供までいる。旦那は幼馴染で、本当に良い子でねえ。あの子は幸せになる筈だったんだ」

そこまで言うと、女将さんはその場に泣き崩れてしまった。

後から、娘が追ってきた。

「母さん、どうしたの？」

宿の部屋からは見えなかった、彼女の姿が見られた。栗色の髪に、女将さんと同じグリーンの眼が綺麗な人だった。

「お客さんの前なのに。ごめんなさいね、母さんが」

彼女は、女将を支えて立ち上がらせると、私達に困ったように詫びを入れた。

ミッシェルは、彼女に告げた。

「あんたが、もし死なずにベルフェゴールが消えたら。あんたは、ありがとうという気持ちになるのか？」

娘は答えた。

「そうね。私だけじゃなくて、夫や母さん、村の人達は皆そのことに感謝をするでしょう。でも無理よ。もしかしたら、貴方が言うように、あの領主は本当に悪魔ベルフェゴールなのかもしれないけれど。ある日突然現れ、結婚を前にした女性を焼き殺し、それを阻止しようとした家族や恋人、友人達も皆殺されてしまった。誰もあの人を阻止できないのだから」

私は思わず声を出していた。

「そんな」

娘は、私の頭を撫でた。

「だから、私に出来るのは、この命をもって主張すること。他の人達が、そうしたように」

そして、娘は私の服を改めて見た。

「これ、私が小さな頃に着ていたものよ。母さんが仕立ててくれたの。この服が大好きだったのよ。レヴィちゃん、ありがとうね」

私はあの時、娘に伝えなかった。きっと、ミッシェルが助けてくれるって。けど、そんな無責任で他人任せな事は言えず、私は無力感に打ちひしがれていた。

「お姉さんの、名前。聞いてもいい？」

「クララ」

クララは、今でも忘れられないくらいとびっきりの笑顔を見せてくれた。

翌朝早く、ミッシェルは支度を済ませると、出掛ける準備を始めた。

私もそれに続こうとしたが、彼はそれに警告を示した。

「レヴィは、来ない方がいい」

ミッシェルなりの、優しさなのだろう。

「ミッシェル、私は貴方とこの物語の結末を見届けるって決めたの。お願い、連れて行って」

ミッシェルの後ろから、メタトロンが現れた。そして、メタトロンは私にその手を伸ばした。

「わかった」

ミッシェルがそう言い、私は彼の後に続いた。

宿のすぐ下になるのであろう、広場には大勢の野次馬が群がっていた。

その中心に、火刑の準備がされており、領主のフリをしたベルフェゴールが立っていた。相変わらず、燃えるようなドレスを纏っている。

そして、既にクララはその場に居て、鎖に繋がれた状態で跪かされていた。

その近くに、恋人であろう若い男性と女将さんが泣き崩れている。

「幸せな結婚があると、信じるか？」

昨日と変わらない質問を、恨みっただらしく悪魔ベルフェゴールはクララに投げ付ける。

「はい。この身が燃やされても、私は彼と私自身に誓います」

「火刑にせよ」

と、ベルフェゴールが叫んだ時である。

なんの躊躇もせず、ミッシェルは人集りを抜けて、その中心に歩み出た。

周りからすれば彼の奇怪な行動に、どよめきが巻き起こる。

私は、彼の服にずっとしがみついて従った。

ミッシェルは、跪くクララを追い越し、ベルフェゴールの前で足を止めた。

私はこの時、ミッシェルが天使に愛されている事を思い知らされた。

その場にいた群衆達も、私と同じように感じた事であろう。

そうでなければ、ミッシェルはかの魔女よろしく蔑まれ、群衆により石を投げられ、その場で火刑にされたのかもしれない。

群衆の前で、メタトロンが姿を現したのだ。

人々はその美しき奇跡に言葉を失い、泣き崩れる者さえいた。

刹那、ベルフェゴールが顔色を変えたように振り返ると同時に走り、逃げようとしたのだ。

メタトロンの羽根が光と共に、群衆を巻き込みながらベルフェゴールを包むと、ベルフェゴールは人の姿から醜い本来の悪魔へと姿を変えた。

それは、炎のような羽根を持ち、牛のような角を生やし、牛の蹄のような脚と鋭い爪の手をしていた。顔は、獣とも人とも判別できないものであった。

先程までメタトロンの姿に恍惚と虜を覚えていた群衆達が、恐怖と嫌悪感で悲鳴を上げ始めた。

ミッシェルは、ベルフェゴールに向かって再び歩みを進めた。

私は、その場でミッシェルの服を離すと、近くにいたクララの元に走り寄った。彼女が私を抱きしめてくれた。

けれど、私はミッシェルから目が離せず、同時に見届けねばならないと思った。だから、抱きしめるクララの腕の間から、じっとミッシェルとメタトロンの見続けた。

メタトロンは、ミッシェルの顔に手をやると、彼の顔をベルフェゴールに向け、片目を見開きさせた。

「ベルフェゴール、煉獄の炎で魂まで焼き尽くされるといい」

ミッシェルが言ったのか、メタトロンが言ったのか、はては二人が同時にそう言ったのであろうか。

脳味噌を切り裂き潰すような断末魔の悲鳴が辺り一面にこだましたかと思うと、無数の斧が左右に揺らめき、ベルフェゴールを切り裂き続ける映像が目の前に広がった。

それは一瞬であった。

はっとして現実に戻った時、目の前にはミッシェルしか立っていなかったのだ。

私は周りを見渡し様子を伺うも、ベルフェゴールが刻まれる姿を見たのは私だけだったようで、その時の私は、これは夢だったのだと思う事にした。それ程に、恐ろしかったのだ。

ミッシェルは振り向くと、私にらしからぬ事を呟いた。

「ダルー」

「え？」

ミッシェルも自分自身の言葉に驚いたようで、私と共に驚いていた。

### 3：ベルフェゴール

ざっと群衆がミッシェルの前に跪き、手を組んで彼を崇め始めた。  
救世主（メシア）の誕生である。

人の心というものが如何に単純であり、想像に幻影を見出し、見たものが相違なければ疑いもなく信じ  
てしまうのだから、なんたる滑稽な現象であっただろうか。

もし、あの醜い姿のベルフェゴールが天使で、美しい姿のメタトロンが悪魔であったならどうなるの  
だろう。

人々は、悪魔を崇拜したのだろうか、とさえ思うのだ。

ミッシェルは面倒くさそうな顔で、且つどう表現していいのかわからないと言った困惑した素振りで、  
私の元へ歩み寄ってきた。

「レヴィ、この気持ちはなんだろうか。胸の辺りが、良いようなこの場から離れて眠りたいような、そん  
な感じなんだ。それから、なんだかとても重たいものがずーんとしている」

私は、我に返った。

「ミッシェル、疲れたのね」

「疲れた、というのか」

「こんな状況は、初めて？」

「いや。人のいるところで悪魔を送ると、いつもこうだ」

ああ、と私は思った。

人々が己を崇める様は、多くの人にとっては恍惚とした陶酔となるであろう。けれど、ミッシェルは  
そういう性分ではなかったようだ。

面倒くさい、のだろう。

ミッシェルの本質は、怠惰で物臭なのかもしれない。

「ミッシェル、部屋で休もう」

ミッシェルは頷き、私を抱き締めたまま呆然とするクララに話しかけた。

「疲れたから、部屋で休みたいんだ。あと、お腹が空いたのだけだ」

クララも我に返り、同時に女将さんとクララの婚約者が駆け寄ってきた。

「貴方様は、天の遣いだっただけだね」

女将さんが、泣きながらミッシェルの手を取った。

「ありがとうございます！ありがとうございます」

婚約者が、ミッシェルの手を取った。

ミッシェルは照れくさそうに笑いながら、困ったようにクララを見た。

それに気付いたクララは、女将さんをミッシェルから離れた。

「本当にありがとうございます。お礼はまた改めて伝えます。さあ、部屋に戻って休んでください。とびっきりの食事を、部屋へお持ちします」

「わかった」

ミッシェルは簡潔に返事をする、私の手を引いて宿へと向かった。

まるでモーゼの十戒の様に、ミッシェルの行く道を人々は開け、跪きながらそれを見送るのだ。

「レヴィが言うように、救世主（メシア）とやらには、なれたかい？」

私は宿に入り、群衆の姿が見えなくなると、ミッシェルに思いつき飛びついた。

「ミッシェル、ありがとう！ 本当に、ありがとう」

ミッシェルは、私を抱き締めた。

「レヴィは、嬉しいわい」

「ええ、嬉しいわ！」

「レヴィは、俺と一緒にいるね」

「ええ、貴方をもう怖いなんて思わないから」

ミッシェルの、満足そうな心が伝わってきた。

彼は私を抱いたまま、部屋に戻るとベッドに寝転がった。私もミッシェルの隣、同じベッドで寝転がった。

あの時の私はまだ幼くて、自信も無かった。だから、同じ不可思議な現象の中で生きるミッシェルが認められた事が、自分の事のように嬉しかったのだ。

魔女でも異端でも無い、夢にまで見た存在である。

ノックがした。

女将さんとクララ、それに婚約者が沢山の料理を運んできた。

どれも食べた事も見たことも無い、豪華過ぎる物である。

「これは、村の人達からの捧げ物もあるんだよ。今日救われた人達が、どれだけ多いことか」  
備え付けの小さなテーブルに、三人は料理を目一杯並べた。

「母さん、もっと良い部屋はないの？」

「そ、そうだね！ 気が付かなかったよ。すまないね」

申し訳なさそうに慌てて謝る女将さんへ、ミッシェルは疲れたように言った。

「いや、いい。ここで」

「けど！」

クララが何か言おうとしたが、ミッシェルがとても面倒くさそうな顔をするので、クララは諦めたようだった。

ミッシェルに、初めて表情というものが現れたのだ。

今まで私だけが感じていた感覚的なものではなくて、それは誰にでも見て取れる表情であった。故に、彼はまだそれを隠すことを知らない。

「ミッシェルは、とても疲れてるみたい。暫く、休ませてあげてください」

私は三人に、深々と頭を下げた。

「悪かったね、いつまでも休んでいいからね。何かあったら呼んでおくれ」

女将さんはそういうと、三人揃って部屋を出て行った。

「ミッシェル、また体調が悪くなるの？」

ミッシェルは、料理を食べずにベッドに寝転がった。

「多分ね。けど、また一日寝てれば元に戻るよ」

「そう。食事は？」

「レヴィが食べればいい」

「駄目よ、ミッシェルも食べないと。元気が出ないわ」

ミッシェルは、ダルそうに起き上がった。

ミッシェルが悪魔を送り込んだ片目に、また前回のよう赤い炎が揺らめいているのが見えた。どうやらそれは、私以外には見えないようだ。

私は、パンとスープ、肉を順番に頬張りながらミッシェルへと話を続けた。

「ミッシェル、その顔はやめた方がいいわ」

ミッシェルは、首を傾げた。

「その顔を見ると、普通の人は離れてしまう」

「どうすればいい？」

私は、私の唇の端を指先でグイッと押し上げた。

「こう、笑うの。笑うと皆、楽しくなるわ」

「笑う？なら、今の顔は？」

「めんどくさい顔」

「めんどくさい……」

ミッシェルは、食事の手を止め真剣に考えているようだった。

「今までは何も感じなかったのに、ベルフェゴールを送ってから、一気に色んなことが溢れ出したんだ。そうしたら、考える事が重たくなった」

私は思わず笑ってしまった。すると、ミッシェルは不思議そうに、私に言うのだ。

「何故笑う？」

「だって、貴方がとても近くに感じたから。メタトロンや悪魔を見ていたから、貴方がずっと特別な存在にしか見えなかったの。私が笑っているのを見て、どう思う？」

ミッシェルは、少しムツとした。そして、自分の胸を指差している。

「ここが少しもやもやするけど、でも、悪くない」

そして、ミッシェルが初めて笑って見せた。

私は、嬉しくて胸が高鳴った。今思えば、子供ながらに初恋に近い気持ちであったのかもしれない。彼の笑顔は、不思議と人を魅了するのだ。

「どう？」

ミッシェルに尋ねられて、私は慌てた。

「貴方の笑顔は、素敵過ぎて毒ね」

「良くないかい？」

「とても、良いつて事よ」

食事を済ませると、ミッシェルは案の定、寝込んでしまった。

私は以前より、彼に愛情を持って接せられるようになってしまった。

#### 4：ベルフェゴール

ミッシェルは、ベルフェゴールを取り込んだ翌日も寝込んだままだった。

更に翌日になって体調は回復したようで、ミッシェルの目の中の不気味な炎も、朝には消えていた。

食事を済ませ、私達はこの村を出ようと思ったのだが、ミッシェルを崇める村人達がそれを許さなかった。

仕方なくミッシェルと二人話し合い、明日の早朝霧の中、旅立とうと決めた。

それで、今日のうちに色々確認した方が良く、私が提案したので、ミッシェルが女将さんに頼んで地図を買った。

地図の見方よくわからなかったけれど、ミッシェルが色々教えてくれた。

ミッシェルは、メタトロンに旅をする為の知恵をも与えられていて、何処で習った訳では無いけれど、これはメタトロンが必要であるから与えたのだと言っていた。

私が以前、巡礼の彼女と旅をしていた時、彼女は地図を読めなかった。地図というか、字が読めなかったので仕方がないと思う。

ミッシェルに地図の読みを習って、私はとても驚いたのだ。

巡礼の彼女と旅を繰り返していた道順は、モン・サン・ミッシェルに向かうどころか、遠ざかっていった。更には、散々回り道をし、見当違いの場所を転々としていたのだ。

ミッシェルは言った。

「少し、回り道しながら向かいたいのだけけど」

地図を指しながら辿る彼の描いた道順は、フランスをぐるりとする長い旅だった。

私に、モン・サン・ミッシェルへの道を急ぐ必要などない。

それより、まだまだ彼と旅しながら、知らない世界を見て回れる好奇心の方が先立っていた。

「ねえ、ミッシェル。私に、字を教えて欲しいの。それから、これから生きていくのに大切なこと。色々知りたいわ」

ミッシェルは、少し困ったように言った。

「レヴィが望むなら、字を教えるのはいい。けど、生きていくのに必要な事とは何かかな？」

そう言ったものの、抽象的過ぎて、自分でもよくわからなかった。

「なんだろう。メタトロンが貴方に与えた知識が、きつとそうなんだと思うわ」

ミッシェルは頷き、言った。

「俺はレヴィから教わらなきゃいけないのに、何だか変だな」

「変じゃないわ。だって、貴方は大人だし、私は子供なのよ。子供が大人に教わるのが普通なんだから」

「へえ。なら、本当は俺がレヴィに教えなければならぬのか」

私は、何だか急に切なくなつた。  
今まで張っていた気が、急に緩んだのかもしれない。それに、どんなに気を張ろうが強がろうが、あの頃の私は甘えたい盛りの子供だったのだ。甘えられる大人が居るなら甘えたくて当然だったろう。

「レヴィ？」

私は、なんとなくミッシェルに抱きついた。彼は何も言わずに、いつもみたいに私を抱き締め、背中をトントンとするのだ。

「こんな子供に、何を教わるの？」

「上手く言えないけれど、色々教わっている気がするよ」

「よくわからないわ」

「俺もわからないよ」

「何よそれ」

私はミッシェルの膝の上に座り直すと、開いた地図の文字を順に指差した。

「ミッシェル、これはなんて読むの？」

ミッシェルは、なんの躊躇いもなく教えてくれる。

「パリだよ」

「これは？」

「ルーアんだ」

「私、もつともつと色々知りたいの。ただ、モン・サン・ミッシェルへ向かうだけじゃなくて」

「そうか」

ミッシェルは、私の話を黙って聞いてくれた。今まで話したくても話せなかった事だった。

「私ね、本当はモン・サン・ミッシェルなんてどうでもいいのかもしれないわ。何度も独りぼっちになつて、どうしていいかわからなくて、ただ目的が欲しかっただけなの」

「レヴィは、モン・サン・ミッシェルに行かなくてもいいのかい？」

私は首を左右に振つた。

「私を娘のように可愛がってくれていた人が居たの。ペストで死んでしまったわ。その人の為に行かなきゃ。それに、私の為に死んだ両親の為にも。死んだ母さんが言つてた。私のこの力は、きっと意味があるんだって。辛いだろうけど、その意味を全うしなきゃいけないのよ」

「レヴィは、難しい事を言うね。俺は、悪魔を全て回収しなければいけないらしい。だから、悪魔が居る場所に引き寄せられるんだそうだ」

ミッシェルが地図で、先程彼の示したルート、現在地から少し離れた場所を指差して止めた。

「ここに悪魔が居るみたい」

「何故わかるの？」

私がミッシェルの膝の上で、彼の腕の中で、彼の顔を見上げた時だった。

「よく見てごらん？」

ミッシェルがそう言った……と思ったのだから、そう優しく諭したのは、ミッシェルではなくメタトロ  
ンだったかもしれない。

再び地図の上に視線を落とすと、ミッシェルの指差す場所にメタトロンの羽根が刺さっていた。彼は  
私が見たのを確認すると、羽根を抜いて私に渡した。羽根は軽くて暖かく、ふわふわでキラキラと輝い  
て見える。この世では、見ることの出来ない羽根だとわかる。

「綺麗」

私はうっとりとした。

「俺からのプレゼント。レヴィに祝福を与えてくれる羽根だよ」

私は、モン・サン・ミッシェルに来てからというもの、今は姿なきミッシェルの姿を追い求め、天使や  
悪魔を手当り次第に調べ続けた事があったのです。

その中で、墮天した天使の話をいくつか知りました。

彼等の中に、人に憧れ、人との交流に憧れ墮天した天使がいくつもいたのです。

そんな墮天使達も、ミッシェルも私も。きっと、この上なく寂しかったのでしょうか。

私がミッシェルに心を開いた時、彼はどれ程に嬉しかったのでしょうか。

天使メタトロンの羽根を与えるくらい、人に与えてはいけけないのに、与えたら罪が増えるだけなのに、  
それでもミッシェルは私にその羽根をくれたのです。

私は、その羽根を今でも生涯の宝物として隠し持っています。私が天に旅立つ時が来たら、それを胸  
に抱いて眠るつもりでいます。

そうすれば、きっとまたミッシェルに逢えると信じていますから。

けれど、その時の私はきつとおばあちゃんになっていてでしょうね。彼は私を、あの時共に旅をした  
子供のレヴィだと気付いてくれるでしょうか。

少し、心配です。



---

【試し読み】天使に縛られて

---

著 者 鞍馬 柊音(くらしおん)

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---